彼岸色の世界

あかいはな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼岸色の世界

【Ｎコード】
Ｎ６３７６Ｙ

【作者名】
あかいはな

【あらすじ】
その人はいつも、いつも。
赤い花が咲いている。
裂いている、心を体をその血の巡りを。
手触りは、過程は味。
華やかな色が、赤で赤。
そんな、日記もとい手記。

『生来、私は彼岸花というものを愛していた。
それがどういう理由だったのか、突き止めるのには自分の人生の半分より多くを費やすことになった。
そうなのだが、それはそれで大いに幸いであったと私は思っている。
』

それは、こんな件で始められる。

まえがき（前書き）

とある人の日記です。
その人は当然ながら実在しません。悪しからず。
と言うか、とあるキャラの内面を微妙に改造した上で解釈し直したというか。
全く描写されていない部分を勝手に加えてありますが、それはそういうものだと思って頂ければ。

まえがき

序文で書いたはずだが、私は彼岸花を愛している。それは物愛ではない。愛でる、という生き物を憐れむ感情では決して無かった。
かと言って、それに見出した空想の人格に友愛を抱いたのか、と聞かれるとそれも否と答えたい。
誤解と忌憚を恐れず言ってしまえば、それは親愛であった。自己愛でもあったし、性愛でもあった。私は彼岸花に恋の感情を募らせていた。
しかしながら一方で、何かの代用品として愛欲の対象となっているのではないか、と考えたこともある。

何故、惹かれるのか。それは人が人に恋をする理由と同じであり、生まれた頃は答えに遠く届かなかった。
それは今の今まで考えて漸く解ったものであり、今この部分で書いてしまうには余りに突飛すぎる。なので後述したい。

●

一ページ目

わたしとは

さて、ここで私の生い立ちについて語っておくべきであるはずだろう。
私は京都のとある一家に生まれた。
少々古い家柄であり、代々剣術を修めることを不文律としてきた家である。
姓について書くのは正直、私としては避けたい。何より私がそういったものを嫌っているからであり、私自身名乗るときは姓を省く。話がずれてしまった。あまり好き勝手に書くのも、改めて誰彼が読む時に目安くない。
決まりごとの通り、私もまた剣術を学んだ。
物心ついたときには彼岸花と共に有り、次に剣があった。そしてその傍らに華道があり、更には料理があった。
物語の登場人物か何かのような多才ぶりではあるが、それも全て彼岸花を愛する理由に通ずるものであった。
つまり、これらの特技とは愛の賜物である。愛とは偉大だ。

続けよう。
私の表見くらいはこの程度で理解してもらえると思う。ここからは彼岸花の話だ。徹頭徹尾彼岸花について書かれていくことになる。
誰が読むかは知らないが、その辺りは堪忍して頂きたく思う。

彼岸花。そう、彼岸花だ。私がそれと出会ったのは生まれてすぐだ。物心付く前だ。私すら知らぬ所ではあるのだが、その頃から花を好んだらしい。その中でもとりわけ……、つまりはそう言うことだ。
そして、それ程なのであるとも分かると思う。子供なのだから物に恋をすることもあって可笑しくはないだろう。私は普通なのだ、と思われた。しかし、いけなかった。彼岸花なのが、少々いけなかっ

たらしい。

●

二ページ目

三頁目

彼岸花、と言われれば何を想起させられるか。
私は恋い慕うそれを調べた。恋とは盲目であるが、愛は刮目させる。
とは言え、その一点、集中したそれしか見えていないわけであり、
言い換える必要もない。訂正しよう。愛も恋も盲目にさせる。

彼岸花。
ヒガンバナ。学名はＬｉｃｏｒｉｓ　ｒａｄｉａｔａ。
別名”曼珠沙華”。語源はサンスクリット語のマンジュシャカ（Manjusaka）。
他にも多数の別名を持つ。
植物界・被子植物門・単子葉植物綱・クサスギカズラ目・ネギ科・
ヒガンバナ族・ヒガンバナ。
そして、全草有毒。開花期には葉はなし。
この国、日本では種子で増える彼岸花は存在しない。全てが遺伝子
的には同一である。
食用も可能。正確には鱗茎に含まれる澱粉。

と、この程度には詳しい。
だが、もっと知りたい。だから、口に含んだこともある。
そのしばらくした後、病院に担ぎ込まれたのは無論である。
鱗茎は水に数日晒しておくことで毒抜きが可能である。
ただし、病院に担ぎ込まれたことから分かる通り、私は待ち切れず
に口に含んだのだった。
我慢弱い子供だったのだから、仕様のない事ではある。

●
３ページ目

四頁目

私が病院に担ぎ込まれた時のことについても語らねばならないだろう。
当時、私は数えで八つだった。
学校の図書室、市内の図書館、家の本棚、どこでも私は本を読んだ。だが、読む本はかなり偏っており、剣劇物か植物図鑑だった。特に猟奇的な物に惹かれていたと思う。怖いもの見たさなのか、それとも天性の嗜好と言うべきか。そればかりは区別が付かない。しかしながら、私は生来狂人であったらしい。生まれながらの死狂いだったのかは分からないが、生まれながら、少しばかりどこか気が変であったのは確実らしい。

話を戻そう。
つまり、私が彼岸花を食すに踏み切った理由とは本を読み漁ったことで得られた。私は謂わば「お宅」の才能も有ったようで、暇さえあれば本を読み耽り、夜更けを越して夜明けになるまで読み続けたこともある。そのせいで目も悪くなった。今や「ど」が付くほどの近眼だ。眼鏡を手放すことが出来ない。
そうして図鑑や小説を読み耽る中、覚えていたことがあった。とある図鑑の中にその文を見つけたのは小学1年生の時の冬だったか。
「彼岸花は食用が可能である」という意の一文があった。そして他の図鑑にもそのようなことが書いてあることに後々気付いた。
食べたい。ああ、食べてみたい。そう思ったことがそれまでに無かったはずはない。だが、彼岸花も花だ。花を食べるのは「おかしい」という理性があった。しかし、「おかしくない」ことが分かると躊躇は無かった。理性は間違っていたと知った。私が初めて理性を軽蔑したときでもあった。
余談だが、毒があることを端から気にしていなかったことに気がつ

いたのは今だ。

●

４ページ目

五頁目

病院に見舞いに来る友達は多くはなかった。私の気性や趣味は、あまり人受けするような感じではない。こんなものを書いて悦に入るのだから。数少ない友人と担任が見舞いに来た。ただ、言い含められていたのか、見舞い品に花は無かった。もちろん、彼岸花は無い。悪縁となるのでそもそも持って来るはずもないのだが。

あまりにも酷く多く食い過ぎたため、入院は十日程になった。主治医によると、致死量一歩手前だったようだ。道理で酷い吐き気や腹下しがあった訳だ。吐くのは我慢した。吐き出しては勿体無いと考えたのだ。汗だくで朦朧となった私に、どうしたのか、と母親が聞いた時には、痙攣しながら、唾を汚く垂らし呂律の回らない口で、彼岸花をいっぱい食べた、と何とか答えたらしい。らしい、というのは当然、朦朧としていたために記憶が定かではないからだ。ちなみにその時、既に私の手足は不随意だった。ただ、びくびくと震えていただけだ。

彼岸花の調達には苦労した。
彼岸花を大量に集めるのには、やはり群生している名所に行ってひたすら摘み取るのが楽だ。
私の生まれが京都であるのは先述した。もちろん育ちも京都だ。
そして行く場所といえば左京区であった。バスに揺られて一人小旅行だ。
持ち帰るために、大きめのリュックサックを担いでいった。
中身は殆ど空だ。入っているのはなけなしの小遣いの入った財布、水筒、そしてゴミ袋だ。袋は花を入れるためだ。

●

五ページ目

六頁目

左京区が八瀬の里、そこが目的地だった。
ちょうど時期であったので、花の集まりを見つけるのにそう時は掛からなかった。しかし、それだけでは足りない。
歩く。そして、人通りの少なくてそれなりの量が生えているところを探した。あまり善い事ではないのはその頃の私でも分かる。だからなかなかに難しい。懐かしんでみれば、やはり子供だったのだ、と思える。少しずつ摘んで歩けばまだ可愛く見えるし、何より効率が良い。狡猾な手だが、だから思いつかなかったのだろう。自分で言うのも何だが、私は素直な人間だと思う。馬鹿正直、とまでは行かないけれども。

適当な場所を見繕った。そこは人通りの少ない上にそこそこたくさん生えていた。所謂穴場だろう。そうではあったが、先客が一人居た。同い年くらいの女の子だ。私とは、少し違う雰囲気がしたが、同族の匂いもした。だが、腐ったような雰囲気がおどろおどろしい、そう感じる。腐っている、というのは輝くような美貌が一切魅力的に見えなかったことだ。今思えば、所謂死人の顔だ。待て、死体であっても魅力的という人間が居るかも知れない。が、この子はそういう類の人間ではない、と思う。否、そうではない、この子もきっと、死すらも美しさを曇らせる要因にならないだろう。つまり、死人より死んでおり、死体よりも腐っているのだ。近づき難さというより近づきたくなさ、というものの正体はこれだったのだろう。

●

六ページ目

七頁目

見たところ、その子は既に食事中だった。見ていて羨ましかった気もするし、気が早い子だな、と思った気もする。話しかけた。話しかける理由も無かったが、そうした。理由がないというのは正確ではない、厳密に言うならば。話しかける「価値」が無いと思われたのだ。「価値」は理由と同義ではない。理由に含まれることが大概ではあるが。しかし繰り返すが、私はナンセンスを敢えて行った。

食べてるんか、とその子に聞くと、うん、と返ってきた。その子――――以後、Kと置く――――は腐敗したようで厭な、美しい微笑と共に答えた。何で食べとるん、と今度問うと、毒やから、と答えた。ふうん、と私は呟いた。尋常な答えでは無いので、もう一度問うた。毒やのに何で食べとるん、と。やはりまともではない答えが返ってきた。それは、てんしさまが迎えに来るんや、と言うものだった。私も子供だった。今もまだ子供ではあるが、厳密にして言い換えるなら当時は幼児だろう。つまり信じた。天使と言えば羽だ。白い翼だ。それを見たと言うのだ。溺れ死ぬ直前に天使に救い出されたというのだ。だからKは毒を呷るのだった。もう一度死に掛けるために。

与太話ではあるが、今思えば真実だったのだろう。

ちなみに、Kを入院中に見かけた。というのも名前だけだが。集中治療室に入っていた。聞こえる噂話によると、交通事故で頭部を強く打った、のだとか。脳に何か障害が起きる可能性が多々ある、とのこと。それにしても、無用心な看護師も居たものである。聞き耳を立てる私も大概ではあるが。

K、というのは名前からも取っているが、私としては「腐り姫」のKでもある、と今思った。

●

七ページ目

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6376y/

彼岸色の世界

2011年12月7日15時50分発行